

信 毎 俳 壇

今 井 聖 選

わが骨を拾ふ人等と苗木植う
(千曲市) たじまたける
葉桜を覆むる齢となりけり
(佐久市) 吉岡 道明
尺蠖の尺ジーンズの膝頭
(松本市) 伊藤 和夫
毛虫歩くや人生は一度だけ
(塩尻市) 神戸 千寛
母の日や厨に立たぬ父がある
(佐久市) 西田 和彦
太道のははぬヒエロ夏に入る
(長野市) 武田 芳子
背徳のパフェのてつぺんさうらんば
(上田市) 中野 孝子
母の日の静かに過ぎて留守居なり
(飯綱町) 小林 紀子
覗き込む子と目を合はす目高かな
(安曇野市) 丸山 進也
動輪の軋む始動や夏の雲
(立科町) 村田 実
佳作
のどけしやフェンスより山羊顔出して
(小諸市) 清水 順子
グリーンラインは読めず花吹雪
(大町市) 原田 勝

一句目、年下の人は「わが骨を拾ふ人」と言い換えられる。その人たちと苗木を植えている。それが志を継ぐということ。二句目、花だけが美しいと思っていた時期が過ぎると葉の美しさも分かるように

なるとこの句は言っている。三句目、ジーンズの膝の位置は尺取り虫の一步の位置を思わせる。感覚の句。四句目、虫を凝視していると人に生まれた「我」を思う。かけがえのない今を生きねばと。

神 野 紗 希 選

ぼつたんの散りてより葦立ちしる
(飯田市) 大石 昭重
虹生れて空の膨らむ信濃かな
(中野市) 芋川 菊水
樹液音とくんと聴けば青葉かな
(長野市) 武田 芳子
象の眼の遠目がちなる花吹雪
(長野市) 北沢 京子
花りんご鬱鬱ならかな斜面
(安曇野市) 小坂るり子
鉛筆を削る音立て夏に入る
(塩尻市) 神戸 千寛
自家製のパウンドケーキ目日傘
(松本市) 伊藤 和夫
妻の忌に雨後の溪壑を供へけり
(佐久市) 角田行々子
鼻に汗具沢山なるカレー食ふ
(箕輪町) 向山 政俊
万物のふるさとは海心太
(長野市) 波母山矩子
佳作
強訴ゆえ流罪との碑辛夷咲く
(松本市) 今井 茂雄
五月でも霜降る朝が信濃では
(長野市) 青木 武明

短い俳句では動詞の選択も重要な描写の要点に。一句目、牡丹といえは花びらのゆたかさだが、散ったあとの茎に美を見いだした。動詞「立ち上る」の力強さに命が漲る。あらゆる状態に美は宿りう

る。二句目、動詞「膨らむ」が虹の輝く空を大きく深く広げ、信濃の風土をことほいだ。三句目は擬音「とくん」から動詞「聴けば」への接続が躍動的。青葉を茂らせる樹の命をいきいきと輝かせた。

坊 城 俊 樹 選

一本の木にある宇宙富貴草
(佐久市) 竹内 勝代
コンクラーベ行方や薔薇は赤くして
(長野市) 武田 芳子
胸中に一物も無く五月鯉
(松本市) 伊藤 和夫
ぼつねんと子の立つホーム遠郭公
(佐久市) 佐藤千栄子
雲映す水に苗植う千枚田
(辰野町) 栗津原吉弘
目つふれば木曾の流れや花つぐひ
(大桑村) 木戸口信幸
校庭を裸足で駆けた昭和吾れ
(長野市) 小日向栄子
哲今も夏の蛇籠の五郎太石
(追分・中村哲医師)
麦秋の野良着を少し纏ひて
(長野市) 田中 重実
あるじ亡き大小屋の中蜘蛛の糸
(佐久市) 市川小夜子
佳作
花袋ありやなしの風とらへ
(小諸市) 清水 順子
万緑の山に向かひてピアノ弾く
(千曲市) 滝沢 武子

一句目、「富貴草」とは牡丹の別名。たしかに牡丹の花は絢爛で気品がある。それが一本の木に咲き、宇宙的な存在になるという感覚は斬新。二句目、「コンクラーベ」とはローマ教皇死去による教皇選挙。その行方は赤い薔薇の花の先にあるという。三句目、鯉が口を大きく開けてはためいている。その中を風が吹き抜ける。その清々しさを「一物も無く」と感じた作者の感性はなかなか。